総括稿2

領域別科目群を越えて

法学部教授／副総長　原田 久

領域別科目群における「二重の不満」

現行の全学共通カリキュラム（以下、「全カリ」）における「領域別科目群」（講義系の「領域別A」と文献系の「領域別B」）とは、「学生が、４年間で自分の専門以外の様々な学問分野に触れ、異質な思考法や問題意識を身につけることを目的」（2015年度『履修要項』135頁）として開設されている科目である（例：会計学の基礎、心理学への招待１）。この領域別科目群が、2016年度からの「学士課程統合カリキュラム」（RIKKYO Learning Style）のスタートに伴い廃止される一方、その理念や考え方は「学びの精神」や「立教ゼミナール発展編」に引き継がれることになった。

当該科目群には、「各科目の提供元である学部に所属している学生は履修できない」という履修制限がある。例えば、理学部提供科目ならば理学部学生は履修できない。そのため、領域別科目群の新設にあたっては、以下に述べる二重の不満にどう対処するかが当初からの課題であった。一つは、「専門知識も関心も持っていない他学部の学生には教えたくない」という教員側の不満をどう和らげるかであった。もう一つは、「自分の専門ではないため、関心を持ちにくい他学部の先生による講義は受けたくない」という学生側の不満をどう解消するかであった。二重の不満が溢れる教室はお互いにとって不幸であり、かかる不満が両キャンパスに蔓延すれば全カリという立教の誇る教学システムの基盤が揺るぎかねない。

領域別科目群は、全カリ委員会での長い議論を経て2012年度よりスタートし、概ね順調に運営されてきたと聞く。しかし、2012年度「領域別A」科目の検証結果や「領域別B」担当教員へのアンケート結果からは、受講者が少ない（専門外故に敬遠されやすい）、受講意欲が必ずしも旺盛ではない学生に直面して戸惑った、古典を読み込む作業はハードルが高過ぎる、といった意見がみられたとのことである（2013年度第６回・第８回全カリ委員会）。

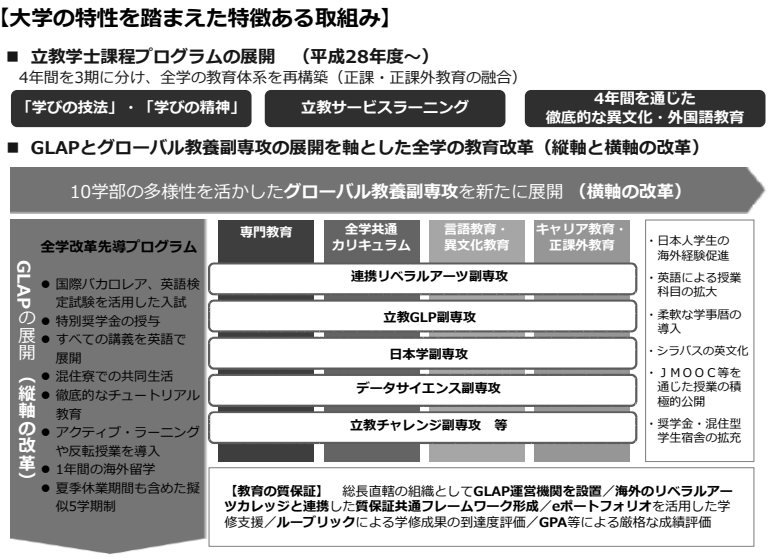
「二重の不満」とグローバル教養副専攻

筆者は、2009年度の１年間、全カリ総合チームメンバー（社会科学分野担当）として領域別科目群の在り方を構想する初期の議論に参画した。しかし、その翌年度には総長室長に着任したため、その後の領域別科目群を巡る議論からは離れることになった。

とはいえ、一度は議論に参画した筆者にとって、両キャンパスのどこかに確実に存在する「二重の不満」には忸怩たるものがあった。

筆者にとって「二重の不満」に立ち向かうまたとない機会となったのが、2014年度におけるスーパーグローバル大学創成支援事業（以下、「TGU」）への申請である。申請にあたっては、個別の学部・研究科の国際化ではなく、大学の国際化を通じた大学全体の教学改革が求められていた。そのため、当該事業において採択を勝ち取るには、全学の改革をリードする先端的プログラムの開発（これが後のGlobal Liberal Arts Program（GLAP）である）と並んで、リベラルアーツ教育を標榜する本学らしい、10の学部全体に及ぶ横断的な改革プログラムをTGUの申請調書に記載することが必要であった（「縦軸の改革」と並ぶ「横軸の改革」）。筆者は、この申請を機に、「4年間で自分の専門以外の様々な学問分野に触れ、異質な思考法や問題意識を身につける」ことを目指した領域別科目群のバージョンアップを図ることができるのではないかと考えた――これが2017年度から導入される「グローバル教養副専攻」である（下記の図表を参照）。

各副専攻のカリキュラムを体系化することにより、教える側の副専攻への関わり方を明確にする。と同時に、副専攻毎に身につけることのできる能力を明示することにより、教えられる側の学習意欲を高める。これらの仕掛けにより「二重の不満」は、以前よりは減少することが期待できる。しかし、根本的には、専門外の分野を教え、あるいは専門外の分野を学ぶ意義について、教える側・教えられる側の双方が納得しておくことが肝要である。



グローバル教養副専攻の構想案

次期全カリ改革の展望

TGUの申請調書における「構想のキーワード」の一つとして掲げた「横断知」という概念は、専門外の教育の意義について教える側と教えられる側の間に相互了解が成立することを願って筆者が案出したものである。申請調書では、ここでいう「横断知」を「異なる文化や専門領域を架橋する知」だと定義している。かかる知の確立と教授こそが吉岡知哉総長のいう「リベラルアーツの現代的再構築」に他ならないと筆者は確信している。

もちろんこの概念化は、筆者の独創によるものではない。概念化にあたっては、「さまざまな領域を、あくまでも『横断』しようとする思考の涵養」として「教養」を捉えようとするオルテガを論じた苅部直の以下の一節を参考にしている。曰く、「現代において、はてしなく専門化し、断片と化した学問の知識を前にして、人々はあたかも密林にふみこんだかのように、途方にくれる。このとき、様々な諸領域をつなぐ回路を、自分なりに見つけだし、展望をえることで、世界との間に調和を取り戻し、人間らしく生きることができる。そうした知の営みを培うものが『教養』なのである」(苅部『移りゆく「教養」』(NTT出版、2007年) 179頁)。

領域別科目群の設置目的にいうところの「4年間で自分の専門以外の様々な学問分野に触れ、異質な思考法や問題意識を身につける」ことの重要性は論を俟たない。しかし、「横断知」という視点から「異質な思考法や問題意識を身につける」必要性を説明するならば、この学びが複数の学問領域の間をつなぐ知の体系の構築につながるからだ、ということになろう。このように、グローバル教養副専攻は、単にもう一つの学問分野を学ぶというだけにとどまらず、様々な学問分野や異なる文化をつなぐという観点から知の修得を捉えている点で現行の領域別科目群の一歩先を目指している、と筆者は理解している。

筆者の目論み通り、グローバル教養副専攻は「二重の不満」を少しでも解消してくれるだろうか？　RIKKYO Learning Styleの構想が概ね固まった段階でTGUの申請をせざるを得なかったことからすれば、グローバル教養副専攻の構想を短期間で実現することは難しいかもしれない。しかし、我々の進む先には、「横断知」という観点から知の体系を再構築するという次期全カリ改革の道筋がはっきりと見えている。

はらだ　ひさし